
君に出逢うために

御堂志生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に出逢うために

【コード】

N8679N

【作者名】

御堂志生

【あらすじ】

「月は何でも知っている」シリーズ3作目/テーマ「電車」/何をやっても最後には駄目になる。そんな僕が、あの日、君に恋をした。

(前書き)

2010年1月、ジョルダンさん「読書の時間」投稿作品です。
おかげさまで予選・決勝とも1位になりました。

「この人、チカンです!!」

かんざきのそむ
神崎望、

33……いや、つい先日、葉桜の時期に34歳になった。職業は一応医者だ。でも、逮捕されたら医者ってやめなきゃならないんだろっか？ その時は副業の占いで食って行くしかないか。僕は女子高生に指差されながら、そんなことを考えていた。

自宅で仕事をしてる僕が、通勤通学で混み合う電車に乗る理由など普通はない。

これには副業が絡んでいた。

僕は亡くなった父が残した自宅で、クリニックを開業している。それはK市にあった。そして占いの副業、これは隣のA市で行っている。

3

なんでわざわざ隣の市なのか、というと……。

A市の中心に色街と呼ばれる飲み屋街がある。随分昔、遊郭があった場所だという。その一角に、昼間は喫茶店、夜はカラオケスナックという店があった。ママの名前を神崎月子という、僕の母だ。

僕の父と母はいわゆる不倫の関係だったらしい。

5年前、30歳間近で僕は初めて父に会った。父も80歳を過ぎて、初めて息子の存在を知ったという。父の妻は長い闘病生活の末、1年前に亡くなっており、母も独身だった。だが、今更という歳だろう。すったもんだの末、僕は父に認知され……その1年後、父は他界。結局、父の子供は僕ひとり、僕が全ての遺産を相続したの

だった。

父にはそこそこの遺産があり、それを突如出て来た隠し子に全部取られたのだ。父の親戚が、僕や母を良く思っている訳がない。

でも、僕自身はそう気にしちやいない。父の最期は僕が看取ったし、相続は父の意思だ。それに、生活に困窮している親戚もいないし……メンタルサポートとデイケアを兼ねたクリニックをやっても、誰にも迷惑を掛けてはいないのだ。

その傍ら、僕は高校時代から母の店の片隅で占いをしていた。『

占月術』 月の満ち欠けで人の運命を占う というのが建前だ。

「Aだと思ってきたけど、親友からBだと言われ迷ってます」

と言うような場合は、大概、Aの道を示してやれば納得する。相談とは、自分の出した答えの確認なのだ。慎重に話を聞けば、答えは相談者が教えてくれる。

と、まあ、これで大学の学費も稼いだわけだし、今では僕のビルの一角で、母は喫茶店とスナックを経営している。

昼間は神崎クリニックの精神科医とデイケアセンターの所長、週末の夜は『占月術 神在月ルンの館』の占い師ルン先生だ。

この厳しいご時世に、そこその実入りのいい占い師をスッパリ辞めるわけにもいかない。大人の事情で、僕はK市とA市を往復していたのだった。

「あたしのお尻を触ったんです!!」

「あ、いや、違います。僕は何もしてませんよ」

グダグダと言いつつ、横から同じ制服を着た少女2人が声を上げた。

「あたし見てました！ 確かにオジサンが触ってました！」

「そうそう、あたしも見てたよ！ このオツサンがチカンで間違いないって！」

「え？ ええっ？ いや、そんな」

その時、僕は気づいた。女子高生らの目に、性犯罪者に遭遇した恐怖はない。むしろ、興奮の色が浮かんでいる。これは 嵌められた？

「ちょーオツサン。逃げんじゃねーぞ」

「誰か捕まえたほうがいいんじゃないか」

善意の第三者が声を上げ始める。駅員に引き渡され、警察が来たらアウトだ。

我ながら情けない人生だったな、と早くも諦めかけていた。

別に、父親がいなかったせい、などと言う気はないが、どうもついてない人生だった。

万引きに巻き込まれて高校を退学になったり。外科医を目指した途端、指の神経を切断したり。小児科医として就職した病院では、院長夫人の誘惑を断わったために、ロリコン呼ばわりされクビになったりもした。

やる気のない占いの仕事だけ上手くいって、今では、辞めるに辞められない。

やっと会えた父ともすぐに死に別れ、落ち込んで精神科のドクターに相談したのだ。それがキツカケで開業したようなものである。父のように老老介護で困ってる人の役に立てれば、そう思ったのだが……。つくづく、僕は医者に相応しくない人間らしい。

電車が駅に滑り込んだ。誰か判らない人間が僕の腕を掴んでいる。占い師が自分の未来も判らないなんて……。いや、占い師だから判

らないのか。そんなことを考えた時だった。

「その人、チカンじゃないですよ」

僕の真後ろにいた女性が声を上げた。20代前半のスーツ姿のOLさんだ。

「私、見てましたから。その人、ずっと両手でつり革持っていましたよ」

その言葉に周囲がざわめく。

「うつせえ、ばばあ！ あたしが触られたって言うてんだろっ！」

「そうだよ。引っ込んでろ、ばばあ！」

口汚く罵る女子高生らに、女性の顔は見る見る真っ赤になる。でも引く気配はない。

「ばばあで悪かったわねっ！ あんたたち、3日前もサラリーマンをチカンだって突き出してたでしょ！」

「こ、この電車はチカンが多いんだよ！」

そうだそうだ、と声を上げるが尻すぼみだ。女性の剣幕に押され気味である。

「1週間前も見えたわ！ 私がこの電車に乗り始めて1ヶ月も経たないのに5回目じゃない！ 出るトコ出たっつていいのよっ！」

女性は腰に手を当て、仁王立ちになり、女子高生たちを一喝した。「うるせえ、ばばあ、覚えてろよ！」

電車が停まり扉が開いた瞬間、彼女らは慌てて駆けて行くのだった。

「あの、ありがとうございました。良かったらお名前を」と言いつつ、本来は逆じゃないかと考えたりする。

「そんなことより、あなたね。女子高生に難癖つけられてボツとしてたらダメなのよ！ もっと毅然とした態度でいなさい！判った！？」

「は、はい」

「あ！ やだ、遅刻しちゃう」

紺のスーツ姿の女性は身を翻し、階段を駆け上がって行く。

その瞬間、僕は恋に落ちたのだった。

あつという間に季節は秋になった。

チカン冤罪未遂事件から早5ヶ月。毎週のように同じ時間同じ電車に乗るが、あの女性に巡り会うことはなかった。

「ちょっと聞いているの、望さん。……来週ですからね。お見合い相手を探してあげたんですから。最初の予定より、ちょっと若いお嬢さんになったけど。いつまでも独身でいられたら、親戚の手前、恥ずかしいのよ。いいわねっ！」

父の出身は県北の旧家だそうだ。やたら煩い身内が多いらしい。ぶつぶつ言って、叔母が見合い写真を置いて帰って行った。

「頼むよ、ルン先生。どうしたらいいのか教えてくれ」

虚しい独り言だ。

僕は占いのハッターリに使う大きめの月長石を撫でながら、見合い

写真を開き……………ルン先生に感謝した。

）
f i n
（

(後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

時系列的には、

「君に出逢うために」「月は何でも知っている」「月のウサギ」

「好きって言えない」

になります。

よかったですらご覧下さい m () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8679n/>

君に出逢うために

2010年10月11日02時33分発行